

図2 蒔絵粉の蒔き直し箇所(文台裏面)



図1 初音蒔絵文台・硯箱



図4 養生(文台天板)



図3 文台の設置台製作と設置



図6 文台天板の汚れ



図5 クリーニング(文台天板)



図8 心張り法による赤珊瑚押さえ



図7 塗膜押さえ(文台脚)



図10 釘・覆輪金具の取り外し



図9 覆輪金具取り外し前



図12 覆輪金具(裏面)



図11 取り外された釘と覆輪金具



図14 黄楊木片の挿入

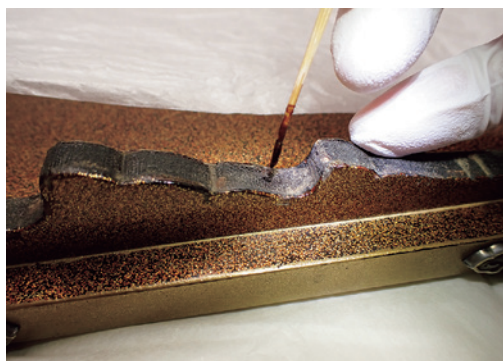


図13 釘穴への麦漆塗布



図16 覆輪金具修理後



図15 覆輪金具の固定



図18 凹凸に合わせて設置台を製作

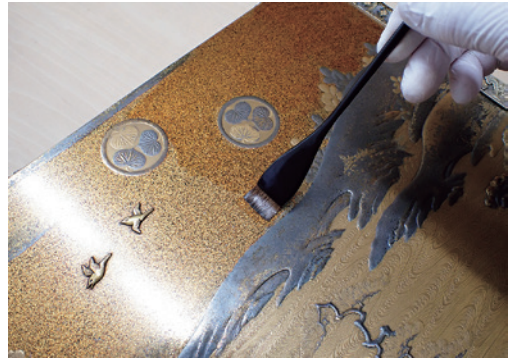


図17 刷毛による漆固め

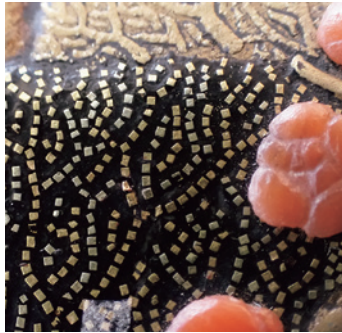


図21 除去後

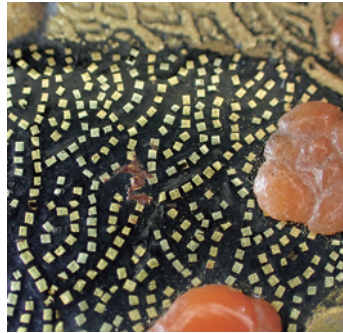


図20 除去前
(中央朱色の付着物)



図19 接着剤の除去



図24 楮紙の差し込み



図23 木地露出部分の錆付け



図22 錐の先端・
留金具の取り外し



図33 布着せの繊維拡大



図32 布着せ(文台脚)



図25 蛍光X線分析の調査風景



図26 蛍光X線分析ポイント(文台天板)



図27 蛍光X線分析ポイント(文台裏面)

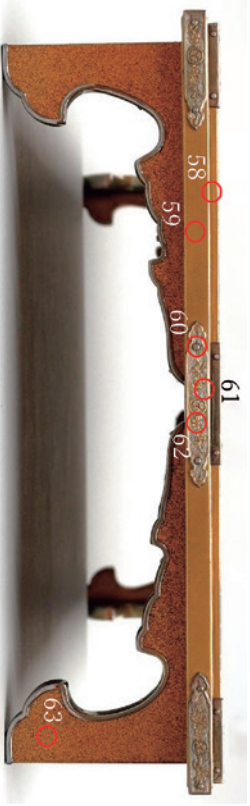


図28 蛍光X線分析ポイント(文台向かって右側面)

図30 蛍光X線分析ポイント(蝟(硯箱附屬))



図29 蛍光X線分析ポイント(硯箱蓋裏)



図31 蛍光X線分析ポイント(硯箱身背面)

〔修理報告〕

国宝 初音蒔絵文台 一基・初音蒔絵硯箱 一合の修理について

板谷 寿美

はじめに

一 修理方針

二 修理前の状況

(一) 初音蒔絵文台 一基について

(二) 初音蒔絵硯箱 一合について

三 初音蒔絵文台の修理

(一) 令和五年(二〇二三)度分

(二) 令和六年(二〇二四)度分

四 初音蒔絵硯箱の修理

(一) 令和五年度分

(二) 令和六年度分

五 初音蒔絵文台・初音蒔絵硯箱の蛍光X線分析

六 初音蒔絵文台の布着せ

おわりに

はじめに

徳川美術館が所蔵する国宝「婚礼調度類(徳川光友夫人千代姫所用)^①のうち、初音蒔絵文台 一基・初音蒔絵硯箱 一合(図1)^②について、令和五～六年(二〇二三～二四)度の二カ年度にわたり、目白漆芸文化財研究所にて修理を実施した(以下、本修理と称する)。本修理の実施にあたっては徳川美術館の活動支援基金を活用するとともに、国と愛知県の補助金および公益財団法人住友財団の「文化財維持・修復事業助成」の補助を受けた。

本稿では、目白漆芸文化財研究所の報告書に基づき、本修理の概要を報告する。なお本修理にあたり、初音蒔絵文台・初音蒔絵硯箱の蛍光X線分析を実施した。さらに本修理中に新たな知見も得られたため、あわせて報告する^③。

一 修理方針

本修理は指定文化財漆工芸保存修理の理念に則り、文化庁の指導のもと、現状保存修理を原則とした。修理に際しては事前調査を実施して、現状確認をした上で修理工程を計画した。また写真撮影を伴った修理の記録を取り、修理後と比較できるようにした。修理終了後に目白漆芸文化財研究所が報告書を作成した。

二 修理前の状況

初音蒔絵文台・初音蒔絵硯箱ともに、木地の収縮による大きな亀裂や歪み・弛み、漆塗膜の剥落、金貝や赤珊瑚の剥落などの深刻な損傷はないが、完成より約四百年の時を経て漆塗膜の劣化が進み、汚れも見受けられることから、予防的措置として本修理を行った。

まずは各作品の概要と本修理前の状況を述べる。なお、初音の調度の全体的な概要については、これまで多く述べられてきたところであり、既刊の図録や先行する修理報告なども参照されたい。⁽⁴⁾

(一) 初音蒔絵文台 一基について

初音蒔絵文台

所蔵番号・初音調度三八・一

法量・高九・五糎、縦三三・八糎、横五八・三糎

総体梨子地に研出蒔絵・高蒔絵・平蒔絵をはじめ、多様な蒔絵技法を用

い、『源氏物語』「初音」帖のうち、冬の御殿の様相を表す。天板に「初音」帖に出てくる和歌のうち、下の句「けふ鶯の初音きかせよ」が彫金埋込と彫金貼付で表される。三羽の鶯および橋は彫金貼付で表される。初音蒔絵調度に施される大半の梅花は銀で象られるが、初音蒔絵文台では赤珊瑚も用いられる点特徴である。天板左右端には筆返しがつき、銀製飾金具も備わる。天板側面には銀製隅金具が施され、波と梅が彫り表される。脚には銀製の覆輪金具がつけられる。

本修理前の状況としては、全体に経年による漆塗膜の劣化および銀の錆化が見られた。埃や汚れの付着が見受けられ、特に極込内には埃が堆積している箇所もあった。また蒔絵部分に朱色の付着物が確認された。彫金埋込の葦手文字の一部の際には、漆塗膜の剥離が見られた。遡れる限りの記録では、修理された記述は見当たらないが、天板や縁回り、裏面の各所には蒔絵粉の色が異なる箇所がある(図2)。これらは過去に修理を施した痕跡であると考えられる。

また、文台の脚の覆輪金具のうち、正面より向かって左側の前脚左側面の金具の釘が一本欠失しており、不安定な状態にあった。

(二) 初音蒔絵硯箱 一合について

初音蒔絵硯箱

所蔵番号・初音調度三八・二

法量・高五・五糎、縦二四・五糎、横二三・〇糎

総体梨子地に研出蒔絵・高蒔絵・平蒔絵をはじめ、多様な蒔絵技法を用い、『源氏物語』「初音」帖のうち、春の御殿の様相を表す。蓋表に「初音」帖に出てくる和歌のうち、上の句である「年月をまつにひかれてふる人

に」が彫金埋込と蒔絵で表される。

蓋に甲盛や胴張はなく、角面取が施された被蓋造で、面取り部分は金沃懸地となっている。初音蒔絵調度に施される大半の梅花は銀で象られるが、初音蒔絵硯箱では赤珊瑚も用いられる点が特徴である。銀および赤珊瑚による装飾は、蓋表のみならず、蓋裏・蓋側面・身側面・懸子に及ぶ。彫金貼付で表される鶯は蓋表に一羽、蓋裏に一羽となっている。身にも胴張はなく、内部中央に下水板が、左右に懸子がある。内容品として硯・銀製水滴・錐・小刀・墨挾が附属する。硯の裏面には「天下一杉本豊後(花押)」と刻まれる。錐・小刀・墨挾にも蒔絵が施される。

本修理前の状況としては、全体に経年による漆塗膜の劣化および銀の錆化、埃や汚れの付着が見受けられた。身内側の入隅には埃の堆積が確認できた。蓋裏の高蒔絵で表した岩の一部には、蒔絵や漆塗膜が摩滅し、下地が露出している部分があった。また蓋の内側面には使用時の開閉による筋状の摩耗痕が複数箇所、口縁部には打損も見られた。

蓋や身の側面、懸子の見込には赤珊瑚の欠失・白色や朱色の付着物が確認できる。銀製の梅花も身の側面や懸子の見込の数箇所欠失していた。内容品については、錐の先が緩み、外れかけている状態であった。

三 初音蒔絵文台の修理

(一) 令和五年(二〇二三)度分

①修理前調査・記録

修理前と修理後の比較ができるよう、作品の全景および部分の写真撮影を行った。また、損傷状況を調査・記録し、修理作業工程を確認した。修

理作業工程の確認をした後、蛍光X線分析を実施した。蛍光X線分析については第五章で後述する。

②設置台製作等準備

作品を安定させて修理作業を行うために、設置台を製作した(図3)。設置台の製作に加え、漆塗膜を押さえるなどの作業で必要な心張りに使用する木枠や治具の製作・準備を行った。

③養生・塗膜クリーニング

クリーニング作業前に損傷箇所や、赤珊瑚や銀の貼り付いている箇所に、作業中に剥落するのを防ぐための養生を行った。養生にあたっては、精製水で希釈し接着力を調整した糊で、小さく短冊状に切った雁皮紙を貼った(図4)。

クリーニングは、作品表面の埃を毛棒で払い落とし、精製水をわずかに含ませたやわらかい綿布や綿棒などを使用し、数回に分けて漆塗膜表面の汚れを少しずつ取り除いた(図5・6)。精製水のみで取り除くことのできない場合は、精製水と無水エタノールを混合した溶液を適宜使用した。付着物については、柔らかい筆を用いて除去した。

ただし、亀裂や剥離などの損傷箇所が見られる際、脆弱な箇所は無理にクリーニングを行わず、含浸や押さえなどの作業を進めて安定した状態であるかを確認した上で、適宜クリーニングを行った。

④麦漆含浸

はじめに木地構造の安定を確認した。その上で漆塗膜が欠失して下地が

露出した損傷箇所を補強するため、麦漆を溶剤⁽⁵⁾で希釈⁽⁶⁾して、筆を用いて含浸を行った。損傷箇所の状態に応じて麦漆の希釈濃度を調整し、数回に分けて含浸した。十分に麦漆を含浸させた後、表面の余分な麦漆を拭き取り、乾固させた。

⑤塗膜押さえ

漆塗膜が剥離している箇所は押さえを行い、安定させた。剥離箇所の状態に応じて、麦漆の希釈濃度を調整し、筆などを用いて剥離塗膜の際より数回に分けて含浸を行った。その後、表面に残った麦漆を拭き取り、クランプなどを用いて剥離箇所の圧着をした(図7)。

⑥修理記録・撮影

令和五年度に実施した作業の記録をまとめ、修理箇所の写真撮影を行った。

⑦報告書作成

令和五年度の作業記録を確認し、同年度分の報告書を作成した。

(二) 令和六年(二〇二四)度分

①赤珊瑚押さえ

赤珊瑚に浮きがみられた箇所には膠を用いて押さえを行い、安定させた。膠は赤珊瑚の浮きの状態に合わせて希釈し、接着力を調整した。筆を用いて際から含浸させた後、余分な膠が残らないよう綿棒などで吸い取り、心張り法で圧着した(図8)。

②切金・金貝押さえ

切金や金貝・極込などで剥離がみられた箇所は、膠を用いて押さえを行い、安定させた。膠の接着力は剥離箇所の状態に合わせて希釈し、調整した。筆を用いて際から含浸させた後、余分な膠が残らないよう綿棒などで吸い取り、心張り法で圧着した。

③釘の新補

脚の覆輪金具のうち、向かって左側の前脚左側面の金具の釘が一本欠失し、歪みが生じたことにより、先端が浮き上がっている状態となっていた(図9)。覆輪金具を脚に添わせるために、覆輪金具を外した。釘を外す際には、周辺を保護する目的で厚手のビニールシートを釘近くに置き、釘抜きを用いて少しずつ力を加えた。そしてある程度釘が抜けた段階で、先端部分を養生したニッパーを用いて、慎重に取り外した(図10)①。釘穴には補強のため溶剤で希釈した麦漆を含浸させ、漆固めを行った。覆輪金具は少しずつ力を加えて歪みを直し、脚から浮かないよう調整した。釘は令和五年度の蛍光X線分析の調査結果を踏まえ、銀製の釘を新調した。②覆輪金具の取り付けに際しては、釘穴に麦漆を充填し(図13)、釘がしっかりと留まるよう、黄楊材の小片を挿し込んだ後(図14)、先端に厚手のビニールシートを取り付けた道具を用いて釘を釘穴に押し込み(図15)、麦漆を乾固させて固定した(図16)。

④錆付け

漆塗膜が欠失している箇所からのさらなる剥落を防止するため、錆漆に⁽⁸⁾

よる錆付けを行った。

⑤ 漆固め

使用による擦傷や経年による紫外線の影響を受けて劣化した漆塗膜の補強を目的として、漆固めを行った。木地呂漆と生正味漆を八対二の割合で調合した漆を溶剤で希釈し、刷毛やスポンジ綿棒⁹⁾を用いて、梨子地部分にのみ塗布した(図17)。その後、漆塗膜表面に漆が残らないよう、丁寧に拭き取り、乾固させた。

⑥ 修理記録・撮影

令和六年度に実施した作業の記録をまとめ、修理前後の比較ができるよう、修理箇所および全景の写真撮影を行った。

⑦ 報告書作成

令和六年度の作業記録を確認し、同年度分の報告書を作成した。

四 初音蒔絵硯箱の修理

(一) 令和五年度分

① 修理前調査・記録

作業詳細は第三章(一)①に同じ。

② 設置台製作等準備

作業詳細は第三章(一)②に同じ(図18)。

③ 養生・塗膜クリーニング

クリーニング作業前に、漆塗膜の剥離を確認した箇所や損傷箇所に養生を行った。養生にあたっては、精製水で希釈し接着力を調整した糊で、小さく短冊状に切った雁皮紙を貼った。

クリーニングは、作品表面の埃を毛棒で払い落とした後、精製水をわずかに含ませたやわらかい木綿布や綿棒などを使用し、数回に分けて漆塗膜表面の汚れを少しずつ取り除いた。精製水のみで取り除くことのできない場合は、精製水とエタノールを混合した溶液を適宜使用した。ただし、亀裂や剥離などの損傷箇所が見られる際、脆弱な箇所は無理にクリーニングを行わず、含浸や押さえなどの作業を進めて安定した状態であるかを確認した上で、適宜クリーニングを行った。

蓋表の朱色の付着物は、柔軟性のある篋を用いて可能な範囲で除去した。朱色の付着物の周囲には、高蒔絵や赤珊瑚・金貝などを用いた装飾がなされていた。装飾によって凸凹が非常に多い箇所であったため、剥離に留意しつつ慎重に付着物の除去作業を実施した。

④ 接着剤除去

接着剤などの付着物が確認されたため、柔軟性のある篋を用いて可能な範囲で除去した(図19～21)。篋での除去が困難な場合には、精製水や無水エタノールをわずかに含ませた綿棒を用いて接着剤を緩ませてから除去作業を実施した。

⑤ 亀裂含浸(構造安定)

下水板の木地接合部に生じた亀裂に麦漆を含浸し、木地構造を安定させた。

⑥ 麦漆含浸

作業詳細は第三章(一)④に同じ。

⑦ 塗膜押さえ

作業詳細は第三章(一)⑤に同じ。

⑧ 修理記録・撮影

作業詳細は第三章(一)⑥に同じ。

⑨ 報告書作成

作業詳細は第三章(一)⑦に同じ。

(二) 令和六年度分

① 赤珊瑚押さえ

作業詳細は第三章(二)①に同じ。

② 切金・金貝押さえ

作業詳細は第三章(二)②に同じ。

③ 錐の調整

初音蒔絵硯箱の内容品である錐は、軸から先端部分が外れかけていた。

錐の先端部分と留金具を軸から取り外し(図22)、軸の差込口から針などを用いて内部に溜まっている塵や埃のクリーニングを行った。

軸の差込口周辺は漆塗膜が欠損して木地が露出していた状態であったため、筆を用いて溶剤で希釈した麦漆の含浸を行った。その後、漆塗膜との際処置として、錆付けを行った(図23)。

錐の先端部分の緩みなどを確認するため、先端部分と金具の取り付けを行ったが、軸側の穴の深さが浅いため、先端部分が軸に収まらない状態であることがわかった。先端部分を収めるには、軸側の穴の深さを調整する必要があるため、文化庁はじめ関係各所と方針を協議した。錐の先端部分が当初のものではない可能性や取り替えられている可能性があることから、徳川美術館では初音蒔絵硯箱以外の初音の調度に附属する錐の先端部分の形状と収まり具合を確認した。初音蒔絵硯箱以外の初音の調度に附属する錐は全てきちんと収まり、安定していることを確認し、関係各所へ報告した。協議の結果、穴の深さの調整は行わないこととした。

ただし、先端部分が軸から抜け落ちないようにするため、差込口内に筒状に巻いた楮紙を入れて穴の径を調整し、そこに先端部分を挿し込んで固定した(図24)。なお、先端部分および筒状に巻いた楮紙は後で取り外せるよう、固定に際して接着剤は用いていない⁽¹⁰⁾。

④ 下地付け

漆塗膜が欠失した箇所⁽¹¹⁾に、漆下地を施した。漆下地は損傷箇所の状態に応じて混合する地の粉を変えた。下地付けをした後、下地を乾固させ、砥石などを用いて下地表面の形状を調整した。下地付け・乾固・表面の調整の一連の作業を数回行い、損傷箇所に漆下地が適切に施されたことを確認

した後、下地表面の漆固めを行った。

⑤ 錆付け

作業詳細は第三章(二)④に同じ。

⑥ 漆固め

作業詳細は第三章(二)⑤に同じ。

⑦ 修理記録・撮影

作業詳細は第三章(二)⑥に同じ。

⑧ 報告書作成

作業詳細は第三章(二)⑦に同じ。

五 初音蒔絵文台・初音蒔絵硯箱の蛍光X線分析

本修理の実施に際して、令和五年(二〇二三)六月二十八日に、東京文化財研究所の早川泰弘氏(特任研究員)・倉島玲央氏(保存科学研究所センター研究員)の協力で、目白漆芸文化財研究所修理室にて蛍光X線分析を実施した(図25)¹²⁾。

蛍光X線分析を実施したのは、初音蒔絵文台の天板および天板の裏面・右側面、初音蒔絵硯箱の蓋裏・身背面・錐で、計七十六箇所のポイントである。具体的な分析箇所については図26～31を参照されたい。ただし初音蒔絵文台・初音蒔絵硯箱には多様な蒔絵技法が用いられている上、複数の

蒔絵粉が密に蒔かれており、X線照射径の中に複数の金属材料が存在する場合があり、正確に金属材料を特定できない箇所も存在した。

初音蒔絵文台・初音蒔絵硯箱は目視でも、金色・銀色・銀黒色と様々な金属の色調が確認できる。地蒔の梨子地や水面は金色に発色しており、金九七～九八%(銀二～三%)の非常に純度の高い金粉が用いられていることが確認できた。また、文台天板に表された葵紋は、金色・金色と銀色の混ざった色・灰色の三色に見え、完成から四百年経った現在に至っては、まったく異なる色味を呈している。その理由は、蒔絵粉の金銀の含有率の差に加え、銀の錆化によると考えられる。分析の結果、金色の葉(図26 No.32)は金九八%(銀二%)、金色と銀色が混ざった色の葉(図26 No.33)は金九六%(銀四%)、灰色の葉(図26 No.34)は金八一%(銀一九%)であった。最も銀の錆化の激しい葉でも金の含有率が八〇%を超えており、つまり現在の色味ほど色調の差はなく、金色のグラデーシヨンの三つ葉葵であったと想定できる。

初音蒔絵文台の隅金具からは金・銀のほか、わずかに水銀が検出された。水銀検出はアマルガム鍍金(メッキ)が施されていたことを意味する。

初音蒔絵硯箱には内容品として錐が附属し、その先端部分は金色に発色している。分析の結果、銅と亜鉛が検出されており、金は検出されなかった。つまり錐の先端部分は真鍮(黄銅)製であった。真鍮は江戸時代においては金の代替素材として用いられることがあった。

以上より、初音蒔絵文台・初音蒔絵硯箱には数種類の金・銀含有率の蒔絵粉が用いられている。中には金九八%(銀二%)という純度の高い金粉も用いられており、初音の調度に最高級の素材が惜しみなく用いられていたことを証明するものであろう。

六 初音時絵文台の布着せ

初音時絵文台は、第三章(二)③で述べた通り、脚の覆輪金具の釘が一本欠失しており、脚から覆輪金具が浮いている状態であった。釘を新調し、金具の歪みを直すため、覆輪金具を外したところ、布着せが確認できた(図32)。布着せに用いられている布は布目が密に詰まっており、藍色に染めてあった(図33)。防虫の目的で、藍で染めた布を用いていたのではないかと考えられる。一般的に、布着せは木地を補強するために施されるが、脚と覆輪金具が接する面かつ木材の継ぎ目でもない箇所⁽¹⁾に施されていた理由は不明である。九州国立博物館でのX線CT調査により、これまで初音時絵調度・胡蝶時絵調度に布着せが部分的に施されていることは確認されていたが、⁽²⁾実際に布を目視で確認できたのは今回が初めてである。今後、幸阿弥家が関与・製作した漆工品の検討のみならず、近世時絵作品の製作を検討する上で参考になる情報であると思われる。

おわりに

本修理を終え、初音時絵文台・初音時絵硯箱は令和七年(二〇二五)三月二十一日に徳川美術館へ返納された。その後、それぞれを外箱に収め、徳川美術館の収蔵庫に格納した。

同年四月十二日から六月八日にかけて開催した徳川美術館開館九十周年記念特別展「国宝 初音の調度」(於徳川美術館本館展示室)で初音時絵文台・初音時絵硯箱ほか、初音の調度を全点展示した。本修理の過程やそこで得

られた知見は展示室内にパネルで掲出し、展覧会に際して作成した図録『大解剖 国宝 初音の調度』でも紹介した。初音時絵文台・初音時絵硯箱は今後も名品コレクション展示室や特別展・企画展で展示するとともに、他館の展覧会への貸し出しなどに活用する予定である。

註

- (1) 平成八年(一九九六)六月二十七日指定。指定番号は工第二五四号。本稿では、『源氏物語』「初音」帖の意匠を持つ四十七件の作品群を「初音時絵調度」と呼称する。また『源氏物語』「胡蝶」帖の意匠を持つ作品群及び金工品や染織品も含めた一括の作品群を指す場合には「初音の調度」と呼称する。
 - (2) なお、今回、修理を実施した初音時絵文台・初音時絵硯箱のほかに、初音時絵調度の中にはもう一組、初音時絵文台・初音時絵硯箱(所蔵番号・初音調度三)が存在している。
 - (3) 初音時絵文台の修理時に発見された新知見は、徳川美術館開館九十周年記念特別展「国宝 初音の調度」(会期・令和七年(二〇二五)四月十二日・六月八日。会場・徳川美術館本館展示室)のパネル展示および展覧会に際して作成した図録「大解剖 国宝 初音の調度」(徳川美術館、二〇二五年)所収の拙稿「初音時絵文台・硯箱」の修理」にて既に公表している。なお公表に際しては、公益財団法人住友財団より「修復文化財展示事業助成」を受けた。
 - (4) 初音の調度は左記図録で全点紹介されている。
 - ・徳川美術館編『徳川美術館蔵品抄三 初音の調度』(徳川美術館、一九八五年)。
 - ・徳川美術館編『新版 徳川美術館蔵品抄五 初音の調度』(徳川美術館、二〇〇五年)。
- 初音の調度のうち、「初音時絵貝桶」(所蔵番号・初音調度三四)・「初音時絵帯箱」(所蔵番号・初音調度一七)・「初音時絵見台」(所蔵番号・初音調度三〇)・「初音時絵見台」(所蔵番号・初音調度三二)・「初音時絵旅香具箱」(所蔵番

号・初音調度二二)、「初音時絵書棚」(所蔵番号・初音調度五六)・「初音時絵書棚」(所蔵番号・初音調度五八)・「胡蝶時絵書棚」(所蔵番号・初音調度五七)は次の通り、修理報告が出されている。

・小池富雄「国宝・初音時絵貝桶、帯箱の修理報告」(『尾陽』二、徳川黎明会、二〇〇五年)。

・吉川美穂「修理報告」国宝 初音時絵見台二基・旅香具箱一式の修理について(『金鯨叢書』四八、徳川黎明会、二〇二一年)。

・吉川美穂「修理報告」国宝 初音時絵書棚二基・胡蝶時絵書棚一基の修理について(『金鯨叢書』五一、徳川黎明会、二〇二四年)。

また「初音時絵書棚」二基・「胡蝶時絵書棚」一基の修理とそこで得られた新知見については、左の論考がある。

・大西智洋「初音時絵書棚」二基・「胡蝶時絵書棚」一基の修復と科学的な分析で判明した新知見(『大解剖 国宝 初音の調度』、徳川美術館、二〇二五年)。

(5) 本修理では、精製水で水練りした小麦粉に、生正味漆を混ぜ合わせたものを使用している。

(6) 本修理で用いた溶剤は、鉱物性揮発油のペトロロールである。本修理において、単に溶剤と記載されている場合は、ペトロロールを指す。

(7) 新補の銀製釘は、令和五年度の蛍光X線分析の結果を踏まえ、銀に二%の銅を混同した合金を用いた。釘は中村大朋氏(金工家、日本工芸会正会員)が製作した。

(8) 錆漆とは、精製水を含ませた砥の粉に生正味漆を混ぜ合わせたものを指す。

(9) 先端部分(綿体)がスポンジでできている綿棒である。スポンジ綿棒は、綿体がコットン製の一般的な綿棒に比べ、発塵性が低く、細かな作業に向いており、拭き取り性能にも優れている。

(10) 錐の軸の差込口以外の部分はクリーニングのみ行った。また小刀・墨挟も時絵部分のみクリーニングを行った。硯・水滴および内容品の金具についてはクリーニングを含め一切の処置を施していない。

(11) 漆下地とは、精製水を含ませた地の粉に生正味漆を混ぜ合わせたものを指す。

(12) 分析装置およびその条件は次の通りである。

装置・BRUKER ハンドヘルドXRF S1 TURBO-SD

X線管玉・Pd(パラジウム)

管電圧・管電流・四〇kV・一七μA

X線照射径・φ六〜七mm

測定時間・六〇秒

装置ヘッド〜資料間距離・約一〇mm

分析結果については早川泰弘「初音時絵文台・硯箱」の材料調査(『大解剖 国宝 初音の調度』、徳川美術館、二〇二五年)も参照されたい。

(13) 前掲註(3) 図録参照。

〔附記〕

本修理に際し、ご協力・ご助言を賜った目白漆芸文化財研究所をはじめ、松本達弥氏(漆芸家)、中村大朋氏(金工家)、倉島玲央氏・早川泰弘氏(以上、東京文化財研究所)、佐藤登美子氏・高木香奈子氏・多比羅菜美子氏(以上、文化庁)に感謝申し上げます(所属機関ごと、五十音順)。

また本修理にあたり助成を賜りました国・愛知県および公益財団法人住友財団に感謝申し上げます。

(徳川美術館 学藝員)

THE TOKUGAWA ART MUSEUM

Contents

Articles

- The Wedding of Tsunagimi and Her Trousseau YOSHIKAWA Miho (1)
- The Introduction and Dissemination of Wooden Bear Carvings in Yakumo, Hokkaido:
Focusing on Their Relationship with the Japanese Folk Art Movement
..... ŌYA Shigeyuki and KŌYAMA-HAYASHI Rie (31)

Introduction of Historical Materials

- Noh Manuscripts Written by Tokugawa Yoshikatsu NOMURA Yayoi (73)

Restoration Report

- On the Restoration of the National Treasures: Writing Table with *Hatsune* Motif in *Maki-e*
Sprinkled Gold and Inkstone Box with *Hatsune* Motif in *Maki-e* Sprinkled Gold
..... ITATANI Nozomi (95)

THE TOKUGAWA REIMEIKAI FOUNDATION

8-11, Mejiro 3-chōme, Toshima-ku, Tokyo 171-0031, Japan.
(phone) (03)-3950-0111

THE TOKUGAWA INSTITUTE FOR THE HISTORY OF FORESTRY

address as above.
(phone) (03)-3950-0117

THE TOKUGAWA ART MUSEUM

1017, Tokugawa-chō, Higashi-ku, Nagoya 461-0023, Japan.
(phone) (052)-935-6262

金 鯨 叢 書 第五十三輯 (年一回刊行)

— 史学美術史論文集 —

令和八年 三月 三十日 編集
令和八年 三月 三十日 印刷・発行

編集者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
深 井 雅 海
徳 川 義 崇

発行者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
公益財団法人 徳川黎明会
電話 (3950) 〇一一七番(代)

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川林政史研究所
電話 (3950) 〇一一七番(代)

〒461-0023 名古屋市東区徳川町一〇一七
徳 川 美 術 館
電話 (935) 六二六二番(代)

〒605-0089 京都市東山区元町三五五
株式会社 思文閣出版
印刷所
電話 (533) 六八六〇番(代)